

農業環境インベントリーがますます重要になる

－ 1 2 号の発刊に当たって－

Perspectives of Natural Resources Inventory Center

對馬誠也*

Seiya Tsushima

農業環境インベントリーセンター（以下、インベントリーセンター）が発行する雑誌「インベントリー」が今回で第 12 号となりました。前回（11 号）から、気分転換も兼ねて毎年表紙の帯の部分の色を変えることにしましたが、今回はインベントリー「売り」の一つである『土壌』をイメージした色から、今年は緑色で広く土壌以外の生物をイメージしてみました。

センター設立当初から、「インベントリー（在庫目録）という耳慣れないものを如何に多くの方に理解してもらうか」が当センター職員の最大の課題だったと言っても過言ではありません。様々な専門分野を持つセンター職員が一丸となって、インベントリーの意義付けに組んで来ました。インベントリーセンターは、明治以来集められた、農水省でも最も古い土壌標本、昆虫標本、微生物標本やそれらの付随情報（地図情報、文献情報など）を保有しています。さらに所内の他領域でも様々な情報（データベース、マニュアル等）が収集・整備されています。これらをセンターとしてどのように整理し、または国民に広く理解してもらうかを考えているうちに、実はそうした出口や見せ方と考えること、すなわち情報の”見える化”自体がインベントリー研究だと考えるようになりました。

この成果として、徐々にではありますが、これまで完全に無関係と思われていた情報が、実は高い親和性を持っていることが明らかになってきました。たとえば、自分のデータと他人のデータベースの同時活用や、それによる新しい価値の創造が実現できるようになりました。最近の成果としては、気象データベースと温室効果ガスデータベース、全国土壌情報閲覧システムなどの独立したシステムに格納された情報を一つのサイトからダウンロードできる GamsDB がありますし、地図上から位置と管理方法を入力すると、その地における農耕地の土壌 CO₂ 吸収量を計算するシステムも作られました。このシステムでは土壌に関するデータベースと土壌 CO₂ を計算する RothC モデルが使われていますが、その背景にはデータベースとモデル計算をインターネット上で実行するクラウドコンピューティング技術があります。このように、今後もデータベースの構築だけでなく、当センターならではの新知見や新しいニーズにあったデータベースの活用もしていきたいと考えています。

しかし、良いことばかりではありません。最近では、全国の研究機関、大学等でも問題になっている情報セキュリティの問題は、インベントリー研究やセンターからの情報発信にも大きな

*農業環境インベントリーセンター長

Natural Resources Inventory Center

インベントリー，第 1 2 号，p1-2（2014）

課題となっています。この問題は、職員一人一人の自覚のみでは対応しきれない面も多々あり、滞欧に一定の予算や人員を考慮する時代になってきたようにも思っています。

最近では、科学の世界だけでなく、ビジネスの世界でも「ビッグデータ」に関する沢山の出版物がでて、一般の人にも情報の保存、言い換えるとインベントリーの維持と活用が今後益々重要になっていることが理解されつつあると感じます。今年の5月 **Nature** 誌が **Scientific Data** を出し、科学的データの蓄積と公開を、科学的成果とみなす動きが活発化しました。世界的にも、データの蓄積と公開が重要と認識するようになった証と考えることができます。

「情報セキュリティ」「知財の管理」をしっかりと考えた上で、「インベントリー研究」をより発展させていくのがセンターの役割だと思っています。今後、さらに多くの情報を集め、あるいは統合するなどして、新しい情報、知見の発信をしていきたいと考えます。